

ジンバブエ国

(Republic of Zimbabwe)

III. ジンバブエ

1. 自然環境の概要と社会経済的特徴

1-1. 自然環境の概況

(1) 国の概要

ジンバブエはアフリカ南部、南緯 16° から 22° に位置する内陸国で、モザンビーク、ザンビア、ボツワナ、南アフリカの 4 ヶ国と国境を接している。アフリカ諸国の中では独立が最も遅い国の一つで、1980 年に英国連邦から正式に独立した。正式独立前の 1965 年にすでに独立を表明していたが英国は承認していなかった。旧国名はローデシアだったが、1980 年の正式独立時にジンバブエ南部の遺跡都市名称に由来する現在の国名に変更した。国土面積は 39.1 万 km² で、日本よりやや広い。人口は約 1,347 万人 (2000 年)、人口の自然増加率は 1.03% (1998 年) とアフリカ平均 (2.3%) (1998 年) に比べ低い (African Development Bank 資料)。人口の 70% は地方に居住し、地方住民の大部分は先住アフリカ人がしめる。小麦や花卉栽培を主とする農業セクターは GDP の 18% で、国民平均所得は US\$620 である (1998 年)。大規模農場が約 4500 ヶ所、小規模農場が約 9000 ヶ所あり、あわせて 17 万 km² の商業農場 (国土の 43%) がある。地域社会の土地 (communal land) は 16 万 km² (国土の 42%) である。国立公園・保護区などは 4.7 万 km² (国土の 12.5%) をしめる。

(2) 自然環境と土地分級

国土の西-北側をザンベジ川が流れ、ザンビアとの国境となっている。ザンベジ川沿いには 1960 年に完成したカリバダムのダム湖があり、その上流にはビクトリア・フォールズがある。国の南側ではリンポポ川が南アフリカとの国境となっている。国土全体は標高 600m 以上の地域が 70% 以上をしめ、高原地形となっている。国土の中央部を北東から南西に丘陵が横切り、北西側のザンベジ川流域と南東側のサベ川、ブビ川流域をわけている。東部のモザンビークとの国境沿いに、標高 2,000m を越える山地 (最高標高 2,592m) がある。降雨量は首都のハラレで 633~1039mm/年、南西部のブラワヨで 480~781mm/年 (いずれも 1992-99 年間の最小と最大値) で、乾燥気候だが冬期の 10 月ごろにはまとまった降雨がある。国土は農業生産の観点から 5 つの地域区分がなされていて、首都ハラレを中心とする土地分級 I と II の地域が、穀物生産農地などに適している。土地分級 III の地域は、耐乾燥性の作物や放牧にのみ適している。限られた放牧利用など以外の利用が難しい土地区分 IV と V の地域は、西部のザンビアーボツワナ国境、南部のモザンビーク・南アフリカ国境に分布する (ジンバブエ土地区分図)。これら土地分級の地域に大部分の国立公園や野生生物保護区が設定されている (図 1)。

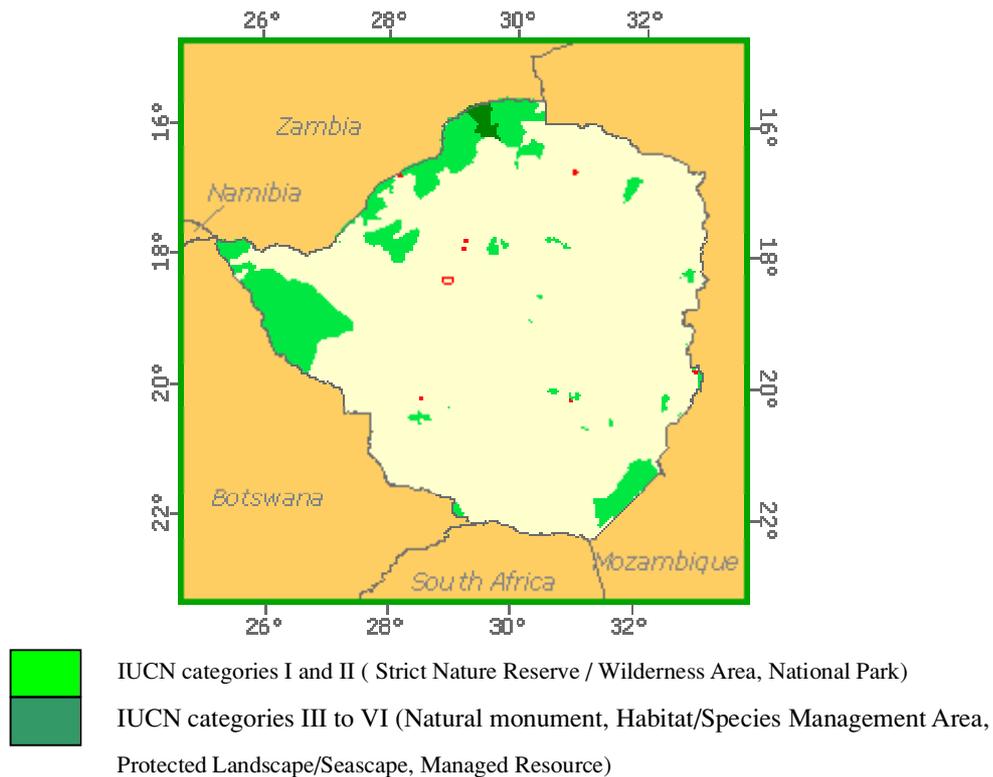


図 1 ジンバブエの保護区位置図
(FAO HP より)

(3) 植生と土地利用

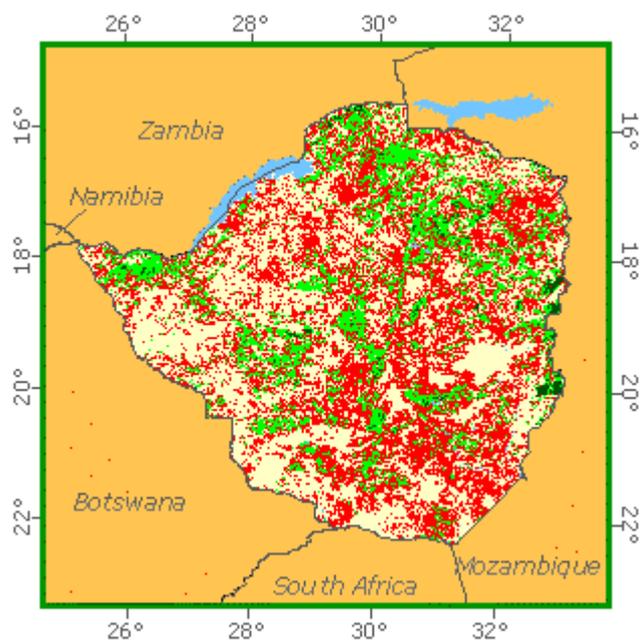
植 生

上記のように国土の 40%以上は永久農地、草地に転換されているが、次のような植生が地域別に見られる (UNDP-WCMC、1992 Protected Areas of the World: A review of national system, Zimbabwe)。

- 1) Dry miombo woodland : 国土の潜在植生としてはこの dry miombo woodland が優占するがこの植生帯の大部分は農地に転換された。
- 2) Mopane woodland : ザンベジ川とリンポポ川渓谷沿いおよび灌漑水路沿いに多い。
- 3) Grassland : 草原は中央部の Great Dyke 沿いに多い。
- 4) Montane grassland and heath : 東部山地には面積 80km²に及ぶ山地草原とヒースが見られる。
- 5) Arid : 西部は乾燥した砂漠地が優占する。

湿地は少ないが、ザンベジ川渓谷中部、Mana Pools 地域、セーブ川流域、西部の Gorhwe and Manjinji Pans、および人造湖の Kariba 湖と Kyle 湖周辺、には湿地が見られる。

FAO による森林区分では、図 2のように東部の山地に一部閉鎖林が存在するが、国の大部分はパッチ状に分布する「その他の森林」とされるサバンナ林などの疎林と非森林域で覆われる。



Legend



図 2 ジンバブエの森林カバー状況

(FAO HP: http://www.fao.org/forestry/fo/country/index.jsp?lang_id=1&geo_id=21)

土地利用

ジンバブエの土地利用は次のように 4 区分される（ジンバブエ土地区分図）。保護区は国立公園など 5 つのカテゴリーに区分されている。土地利用では少数の大規模商業農地と、共有地の小規模生産と農業生産の 2 極化が進んでいる。

- 1.農地など（Other land）
- 2.共有地（Communal land）
- 3.森林（Forest land）
- 4.保護区（Protected areas）
 - 4-1.国立公園
 - 4-2.サンクチュアリー
 - 4-3.レクリエーション公園
 - 4-4.植物園
 - 4-5.サファリエリア

土地所有区分と農業生産性（土地分級）、人口配分および森林状況を表に示した。面積的には共有地と商業農地が大きな比率をしめるが、人口比では共有地の人口が国の 74%と多くをしめる。

森林面積は森林委員会の統計上は、国土面積の 58%、23 万 km² をしめるが、このうち閉鎖林は東部のモザンビーク国境に小面積あるだけで、他の森林は疎林、サバンナ植生を含む。

表 21 ジンバブエの土地所有区分別面積、人口配分と森林面積 (1,000ha)

項目	土地所有区分				計
	共有地	再定住地	商業農地	国有地	
面積 (1,000ha) (対国土面積%)	16,360 (42%)	3,790 (8%)	12,450 (31%)	6,970 (18%)	39,570 (100)
土地分級 (潜在農業生産性 ¹⁾)	IV、Vが 74% をしめる	II、IIIが 56% をしめる	I、IIが 31% をしめる	IV、Vが 80% をしめる	
人口 (人) ²⁾ (対全国人口%)	5,352,304 (74%)	426,687 (6%)	1,346,753 (19%)	38,806 (<1%)	7,164,550
森林面積 (対全国森林%)	10,000 (43%)	n.a	7,000 (30%)	6,000 (26%)	23,000 (100)

1) 主に降雨量に基づく農業生産性の 5 区分：I~IIIが農業適地、IV、Vは不適地とされる。表 21 参照

2) 出所年不明。1992 年時点で人口は 1,000 万人をこえており、この統計はかなり古いものと考えられる
Status of forestry statistic in Zimbabwe (www.fao.org/forestry/fon/fons/outlook/africa/acp/mutare/crizim-10.htm)

表 22 土地分級

区分	実効年間降水量 (mm)	農業
I	>635	種々の農業に向く
II	500-635	大規模なトウモロコシ、タバコ、畜産
III	400-510	混合農業、中規模畜産
IV	350-450	中規模農場
V	<400	畜産のみ

出典：W. D. Michie et al. ed. Lands and Peoples of Central Africa 1983

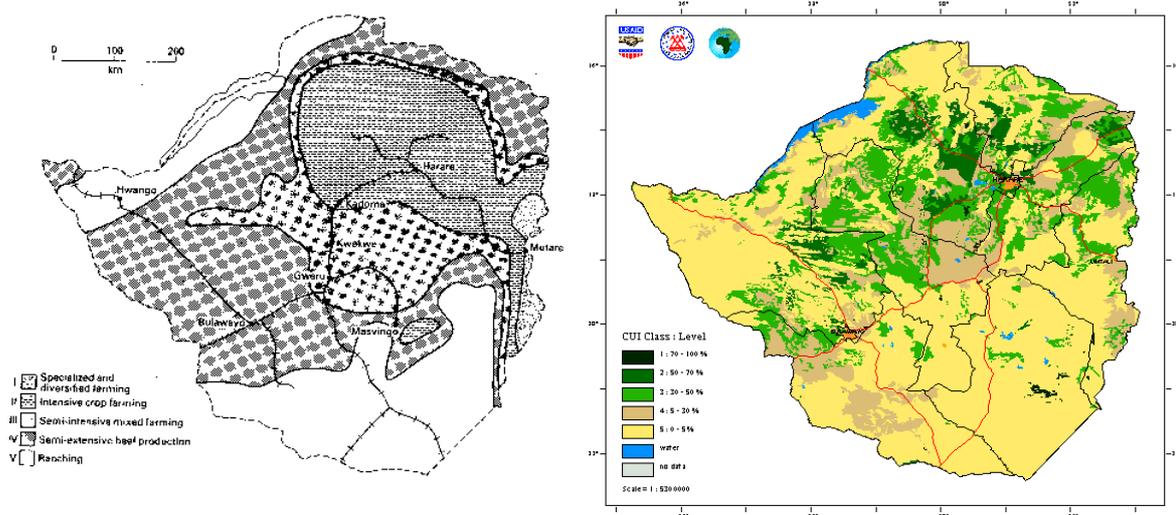


図 3 土地分級 (左) と実際の農地利用状況 (右)

(出典：左 Lands and Peoples of Central Africa Longman 1983, 右
http://edcintl.cr.usgs.gov/adds/c1/r3/zi/doc/cuil/zicuil.gif)

1-2. 生物多様性と希少種

(1) 生物多様性

ジンバブエ国内の主要分類群別の生息・生育種数およびその中の絶滅危惧種数を表に示した。ジンバブエは野生生物の生息種数や固有種数は、アフリカの中で特に多いわけではないが、後に述べるように自然保護区面積率が高いこともあり、国内の絶滅危惧種数は比較的少なく各分類群がバランスよく出現することが特徴としてあげられる。この表には示していないが、国内生息種のうち固有種はモザンビーク国境の山岳地に多く見られる。

移入種として防風林と燃料用に植栽されたオーストラリア産のユーカリがあり、また東部地域ではタンニン採集のためオーストラリア原産のワトル (wattle) (アカシア風の木) の植林がある。

表 23 ジンバブエの生物種数

分類	種数	絶滅危惧種*
哺乳類	270	12
鳥類	640	10
爬虫類	153	0
無脊椎動物		2
植物	5,200	14

出典：The Nature of Zimbabwe IUCN 1988

* The 2000 IUCN Red List of Threatened Species

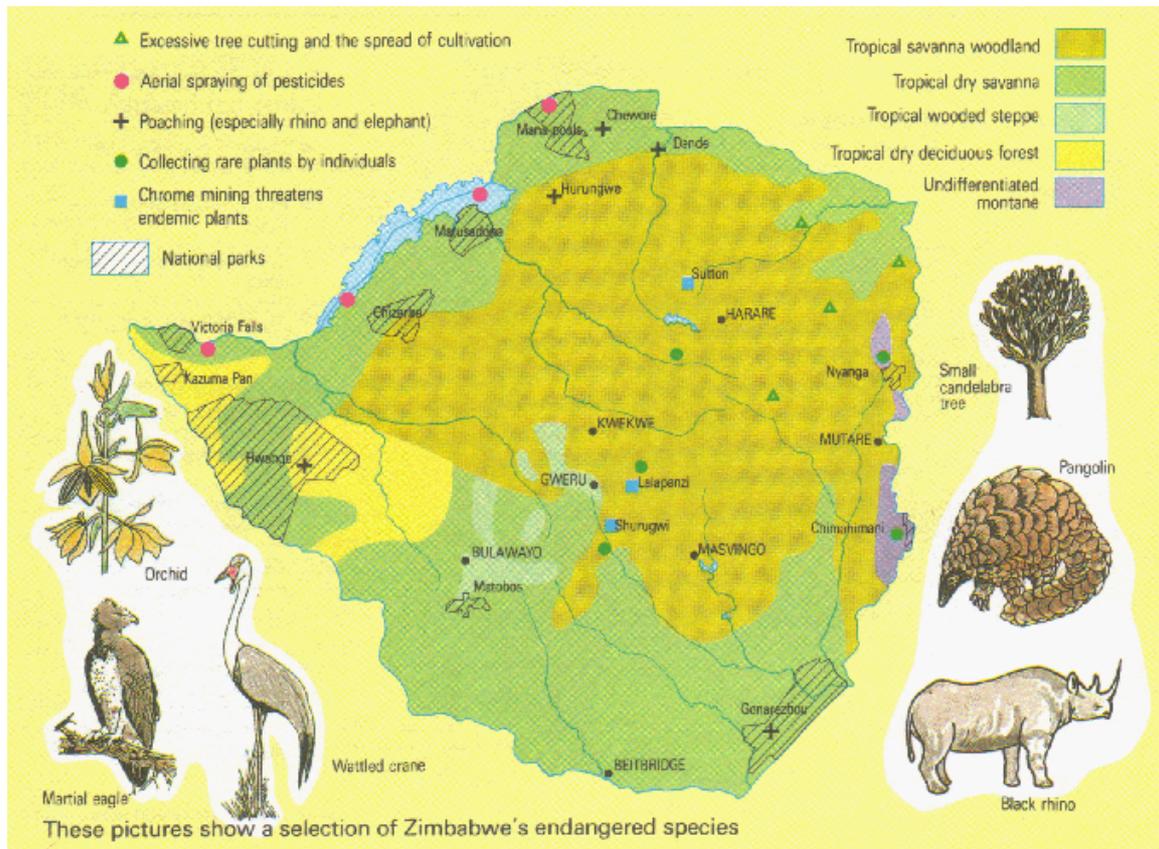


図 4 危機に瀕した野生生物と生息地

出典：Senior Atlas for Zimbabwe Longman Zimbabwe / Ministry of Education and Culture 1990

(2) 希少種

IUCN レッドデータブックに掲載されているジンバブエに生息する希少種数を表 23 に示した(表 22 にはこのうち絶滅危惧種のみを示している)。前述のようにジンバブエには絶滅危惧種は比較的少ないが、絶滅危惧 I 類としてクロサイ、シロサイなどが生息する。このうち、クロサイはアフリカの中でもジンバブエは重要な生息地であるが、1987 年の 1800 頭に比べ 1999 年には 435 頭に減少した(表 25)。一方、アフリカゾウの生息数は 1980 年代より 90 年代にかけて増加している(表 25)。

表 24 IUCN レッドデータブック

区分	絶滅種 EX	野生絶滅種 EW	絶滅危惧種			低リスク-保全依存種 LR/cd	低リスク-準絶滅危惧種 LR/nt	データ不足種 DD	合計
			絶滅危惧 I 類 (IA) CR	絶滅危惧 I 類 (IB) EN	絶滅危惧 II 類 (危急種) VU				
植物	0	0	0	4	10	0	8	0	22
動物	0	0	1	4	19	21	21	4	70

出典：The 2000 IUCN Red List of Threatened Species

表 25 ゾウとサイの生息頭数変化

地域	アフリカゾウ		クロサイ		シロサイ	
	1987 年	1998 年	1987 年	1999 年	1987 年	1999 年
ジンバブエ	43,000	70,000	1,800	435	208	208
全アフリカ	764,410	5-600,000	3,800	2,700	4,600	10,400

出典：IUCN African Elephants and Rhinos; Status Survey and Conservation Action Plan 1990

Zimbabwean Proposal for CITES COP11 (Prop.11.23) 2000

IUCN SSC HP African Rhino Specialist Group <http://www.rhinos-irf.org/specialists/AfRSG/AfRSG.html>

1-3. ジンバブエの社会経済概観

(1) 社会経済状況

1) 社会経済状況一般

ジンバブエの独立はアフリカ諸国の中ではナミビア(1990 年)について遅く、周辺のザンビア等が独立した 1960 年代から約 20 年遅れ、1980 年である。面積は約 39.1 万平方キロメートルで我が国の面積よりやや大きい。1998 年の人口は 1,350 万人で、その内約 70% の 950 万人が地方、30% の 400 万人が都市に分布している。国民総生産(GNP)は US\$72 億ドルで、一人当たりの GNP は US\$620 である。GDP 構成は農業約 20%、工業 35%、サービス 45%となっている。農業は極少数の白人殖民者の末裔が所有する大規模商業農地と、共有地における大多数の黒人による自給自足型小規模農業との 2 極化が進んでいる。国土面積の約 40% を占め農業生産条件の劣悪な共有地に人口の 70% を占める黒人が生活を営んでいることが経済構造上の問題となっている。1980 年の独立当時、白人は国民の 3% 程度(約 20 万人)を占めていたが、国外移住により減少する一方、黒人人口の増加により、1999 年には人口に占める白人比率は 1% 以下(約 7 万人)程度まで低下している。

2) 経済状況

貿易輸出は約 US\$20 億ドル（葉タバコ、綿花、フェロアロイ、ニッケル、金等）であり、輸入は約 US\$19 億ドル（機械・輸送機器、工業製品等）である。主要相手国は輸出入とも南ア、英国、ドイツ、米国である。1991 年に、それまでは国家統制色の強い経済運営体制から市場経済化が始まり、南アの地域経済への参加も始まって海外投資も伸び、経済は順調に成長していたかに見えていた。しかし 1996 年には約 7.0%あった実質経済成長率が、1997 年以降は 2.0%～1.4%と激しく低下し、現在も経済は停滞している。1996 年での就業労働者数は約 300 万であったのが、2000 年では失業率が 50%となっている。物価上昇率についても 1996 年には前年比 16%であったのが、1998 年では 58.5%となっており経済状況の急激な悪化が覗かれる。この経済状況の悪化は、1998 年に勃発したコンゴ民主共和国での内戦への軍事介入に端を発し、内戦介入に反対する IMF・世銀が援助凍結等を行い一気に外貨不足が加速されたことによっている。外貨不足による通貨の大幅切り下げ、ガソリン等油価の高騰がおり、経済は危機的状況を呈している。外貨の稼ぎ手である観光セクターは、1995 年に初めて純観光目的の観光客の年間入りこみ数が 100 万人を超え、その後も順調な伸びを記録し、1998 年には同 180 万人に達したが、以降経済状況の悪化による、治安の悪化、後述する農地占拠問題等により 2000 年では 30%近い落ち込みを見せた。来年の 2002 年には大統領選挙が行われるが、その結果が明らかになるまではジンバブエの経済社会の不安定は続くと思われる。

3) 社会状況

現在ジンバブエでは白人所有の土地買い上げ、再分配をめぐって与野党が対立するなかで、70 年代当時の内戦を戦った退役軍人を中心として暴力的土地占拠、暗殺等が繰り返され国際的問題となっている。この混乱を原因として英国他大使館の閉鎖、国際援助機関の撤退等が起こっている。ジンバブエの土地所有形態は歴史的には、1980 年代に入っても全ての土地は伝統的な共同所有地であったが、実際には政府、共同所有、個人所有の 3 形態に区分されている。所有形態別土地の占有率は以下の表のとおりである。

表 26 所有形態別土地区分

土地利用区分	所有形態	面積 (km ²)	占有率 (%)
共同地	共同	163,500	41.8
再定住地	政府・共同	26,400	6.7
商業農用地	個人	142,400	36.4
国立公園	政府	47,000	12.1
国営林地	政府	9,200	2.4
都市及び政府地	個人・政府	2,200	0.6

注：1) 商業農用地の個人所有者は約 4,500 家族のジンバブエ籍白人によって占められている。

2) 国立公園のうち約 50%は狩猟区

1980 年 4 月英国の仲介により内戦は終結し、選挙の結果ムガベを初代大統領としてジンバブエ国が独立した。その後の経済運営は 90 年代半ば頃まで、白人ジンバブエ人社会との共同で比較的円滑に進んでいたが、独裁体制の続く中国際的な自由市場経済体制への適応に遅れを来し、近年経済は停滞していた。独裁体制への批判と経済停滞の不満を基盤とする都市部住民の支援を

背景に民主化運動（Movement of Democratic Change）は 2000 年の選挙において得票を重ねた。ムガベ大統領は体制の挽回を狙い特に地方部での支援を得るため、主に白人の約 4,500 家庭が所有する大農場のうち 3,000 家庭について法的差し押さえを宣言したが、これが土地の不法占拠を誘発した。このジンバブエにおける土地不法占拠事件は、南アフリカの黒人社会に波及し、クワズールナタール州では約 5,000 件の白人所有地不法占拠が相次いでいる。

（２）自然開発と観光の潜在性

1) 資源開発

ジンバブエは独立が 1980 年と他のアフリカ諸国と比べて遅いが、逆に社会基盤整備は南アフリカをのぞくアフリカ諸国の中でも格段に整備が進んだ国の一つである。特に道路、鉄道の交通インフラは幹線道路網が整備されている。比較的経済基盤が整備されている事、隣国が南アフリカというアフリカの経済大国であることから経済発展の潜在性は高い。我が国の自動車メーカーであるマツダも、ジンバブエを対アフリカ諸国市場への戦略拠点として直接投資を行っている。鉄鋼業、食品加工業、タバコ製造業、化学品製造業、繊維業、輸送機器製造業、製紙業、木工業等の工業が盛んであり、石炭、金、クローム、ニッケル等の鉱業も伝統的な産業となっている。比較的整備された経済基盤に加え、稀少金属資源の賦存量も認められており、一時は渇水で農業生産が低下した時期もあるがザンベジ河の豊富な水資源には充分有効活用の余裕があり水資源の賦存量も多い。更に、ビクトリアフォールズという国際的な自然観光資源を有することから、持続的な環境保全が確保されるという条件下において、さらなる資源の有効活用は可能である。政治状況が好転し、直接投資が増加することになれば農業を含む資源の開発は更に進むと考えられる。

2) 観光資源と潜在性

観光セクターについても資源の豊富な国といえる。ビクトリアフォールズは世界三大の滝の一つであり。ビクトリアフォールズのような自然景観を資源とする観光に次ぐ、重要な観光資源は野生生物を中心とした国立公園及び自然保護区である（保護区の詳細は後述）。ワンゲ国立公園、カリバ国立公園他、世界的にも名の知れた国立公園が周辺隣国との国境に広く点在している。CITES による規制が効力を発揮する以前、他の保護区を有するアフリカ諸国では、激しい密猟が横行し、稀少野生生物の絶滅の危機を迎えた国もあった。そのような時期においても、ジンバブエは野生生物保護管理が充実していたため同様の危機に見舞われることがなく、逆に一部の公園ではゾウの生息数が生息域である公園の収容量を上回り、公園から公園へゾウが移送され国レベルで公園の環境維持が図られていた。ジンバブエは、この点で野生生物管理の指導的立場にあったといえる。自然保護区のほか、サブサハラ・アフリカでは随一の石造建造物であるグレートジンバブエ他、南部アフリカの殖民の歴史に指導的役割を果たしたセシルローズの墓、ブラワヨの町並み等殖民の歴史に関わる対象物も多い。但し、日本の面積に等しい面積に、観光資源が夫々孤立して数百キロも離れ分散しているという条件は、観光客が利用する交通面で利便性を欠き、コスト負担も高くジンバブエ観光の一つの弱点となっている。観光セクターも他のセクターと同様に資源は豊富であるが、有効活用の面から潜在性は高い。

3) 観光需要

過去 10 年の海外観光客数の推移を表 に示す。

表 27 ジンバブエ 目的別訪問者数の推移 (1990-1999、千人)

年	合計 1	合計 2	観光	業務	教育	トランジット
1990	636	583	527	53	3	53
1991	696	636	587	46	3	60
1992	765	703	629	68	6	62
1993	972	878	732	137	9	94
1994	1,139	1,039	937	94	8	100
1995	1,581	1,415	1,268	130	17	166
1996	1,792	1,596	1,410	133	53	196
1997	1,549	1,335	1,075	250	10	214
1998	2,402	2,091	1,828	220	43	311
1999	2,721	2,250	1,762	442	46	471

(出典：中央統計局、注：1) 合計 1 は全合計、2) 合計 2 はトランジットを省く合計)

年度毎の変化及び過去 10 年の平均変化率 (CAGR) は以下の表 28 のとおりである。

表 28 ジンバブエ 目的別訪問客数の年次変化 (%)

年	合計 1	合計 2	観光	業務	教育	トランジット
1990	-	-	-	-	-	-
1991	9.4	9.1	11.4	-13.2	0.0	13.2
1992	9.9	10.5	7.2	47.8	100.0	3.3
1993	27.1	24.9	16.4	101.5	50.0	51.6
1994	17.2	18.3	28.0	-31.4	-11.1	6.4
1995	38.8	36.2	35.3	38.3	112.5	66.0
1996	13.3	12.8	11.2	2.3	211.8	18.1
1997	-13.6	-16.4	-23.8	88.0	-81.1	9.2
1998	55.1	56.6	70.0	-12.0	330.0	45.3
1999	13.3	7.6	-3.6	100.9	7.0	51.4
CAGR	17.5	16.2	14.4	26.6	35.4	27.5

(出典：中央統計局、1999 年)

サブサハラ・アフリカ全体の観光客入りこみ数は 1999 年では 2,600 万人であったので、ジンバブエの同全体に占める割合は 8.6 %であった。上記表 に示されるように、ジンバブエの観光入り込み客数は 1999 年までの過去 10 年では年平均 14.4%の増加である。同地域の年度比変化率は平均 7.6 %であることから、ジンバブエの観光入りこみ客は順調に推移したことが窺える。

国際観光客の発出地は南アフリカ、英国、ドイツ、ヨーロッパ諸国、米国の順に多い。90 年代中ごろから南アフリカとの交流が自由になったのを受けて、南アフリカからの訪問客が増えたことが、過去数年の (特に 1997/98 年) の伸びに繋がっていると判断できる。同時に南アフリカにおいても同時期に国際観光客入りこみ数の大幅な増加が見られることから、南アフリカとジンバブエを組み合わせたヨーロッパからのツアーが盛んになってきたと考えられる。確かに、観光客数は伸びてはいるが、最終目的地がビクトリアフォールズに偏っており、南アフリカとの組み合わせツアーが多いため、ジンバブエでの実質滞在日数は平均約 2.4 日と限られている。1999 年の入りこみ数は 225 万人で、WTO のデータによると同年の観光収入は US\$1.45 億ドルとされているので、国際観光客一人当たりの直接観光支出は約 US\$65/人と推計される。年間観光収入は商品輸出総額 (US\$25 億) の約 7 %に相当する。単純計算ではあるが、年間 7.0 %で入りこみ数

が伸びると 2010 年で 470 万人 (US\$3 億ドル)、2020 年で 940 万人 (US\$6 億) となることが予測される。

4) 観光産業の現況

環境観光省は従来より、観光市場開発戦略の基本方針として、対象市場をアップマーケットに絞り、宿泊施設の質はおしなべて高く、ハラレ以外のホテルは、自然景観をうまくとり入れた潇洒なシャレー形式の宿泊施設が数多く見られる。部屋数の合計は約 2,500 であり、概ね、ハラレ (900)、ピクトリアフォールズ (800)、ワンゲ (230)、カリバ (220)、ブラワヨ (210)、東部山岳地域 (140) となっている。従来、保護区のサファリツアー (野生生物の観察と写真撮影) は国立公園の職員がガイドを務めていたが、民営化により民間のツアー会社が行うようになった。サファリツアーガイドは免許制で経験、セミナー受講、学科試験、実地試験によって厳選された者しか免許を得ることが出来ない。免許を得たガイドだけが、公園内での車両の運転が許されている。ジンバブエでは、公園内を走る車は殆どがサファリツアー会社が所有、運営し、免許を得たガイドによって運転されている。ガイドは公園内道路わきに点在する野生生物を視認した場合、車両を止めて同乗する観光客に解説を行うと共に観光客の質問に対して的確な答えを与えて環境教育も合わせ行う。このガイド職は、公園周辺に居住する若年男子労働層のあこがれの的ともなっており、重要な就業機会でもある。ジンバブエの伝統的な手工芸品は石及び木を用いた彫刻であるが、独特のフォルムは特にヨーロッパからの観光客に人気があり、観光客用のみやげ品として観光地で売られている。観光に関連したみやげ物産業が近年発達しつつあるが、商店の乱立もあり今後の課題となっている。

5) 観光産業の課題

ジンバブエ環境観光省は従来より、保護区の有する固有の自然資源を重要な観光資源として、その保全を図り且つ観光業の投資誘致、育成に努めてきた。政治的な混乱により、ここ数年大幅な観光入りこみ客の減少が見られるが、国際観光客発出国側における自然資源を基盤とするネーチャーツーリズム、エコツーリズム市場拡大傾向と、ジンバブエの持つ観光デステイネーションとしての潜在性を勘案すると、将来的にジンバブエへの観光客数は増加することが予測できる。しかし、この総体としての需要増加を如何に有効に引き付けるかと言う、戦略的な観光開発、市場開発計画の策定が重要な課題となる。更に、重要な観光資源でもある自然環境の持続的な保全を確実にするために、観光産業から発生する便益を如何に有効に地域住民に還元して行くかという便益還元システムの構築及び実施が現下の課題である。特に注意を要する観光地域は、ピクトリアフォールズ周辺地域である。既に、ピクトリアフォールズ周辺では、急激な観光入りこみ客数の伸びによって、宿泊施設、商業施設等の施設規模の増加が見られ、乱開発気味になっており、地域の社会経済基盤に圧力がかかっている。観光産業は就業機会、商業機会の創出を生むため近隣地域から観光地へ人口が流入する。この人口流入は、水道、下水道、廃棄物処理施設等の社会経済インフラに圧力を加えるだけでなく、管理が不行き届きであると町並み景観を含む環境全般に負の影響が現れる。自然環境を観光の対象とする観光地域においては、直接的な観光対象地だけではなく、対象地を含む周辺地方都市、村落等を統合した地域としての環境管理が資源価値の持続性を確保する上で重要である。ピクトリアフォールズが特に有名な観光地であることから、観光客の集中が見られる。同地を訪問する観光客はピクトリアフォールズに隣接したザンベジ国

立公園等の保護区をも訪問するが、同公園は面積も狭く、観光客の受け入れには一定の限度があるはずである。このような観光客の集中は将来的に環境の劣化を招く恐れもあり、ビクトリアフォールズ周辺の他の観光地に観光客を誘導、分散させる方策をとる必要がある。その対象としてはワンゲ国立公園、カリバ国立公園等をあげる事ができるが、これらの公園が現況で受け入れることの可能な適正観光客数の算定は行われたことが無い。宿泊施設についても地域への戦略的な配分がなされている訳ではないので、今後の観光客増加をにらんだ観光開発戦略は策定されていない。

6) 野生生物管理

観光資源としての保護区の野生生物収容力についても公園を管理する行政機関で研究が続けられている。しかし、公園の観光ピーク時期における一日の観光客数（公園訪問者数）を研究の対象とした形跡は無い。野生生物と観光客数の各公園における最適数を知ることにより観光客導入戦略を策定することが出来る。これは観光施設規模、公園の施設規模（公園内道路、周辺宿泊施設等）を設定するための基礎要素となる。観光開発戦略を策定する上で、重要な要素となるデータの整備、モニタリング体制の整備は不可欠と考える。公園内部の自然環境に対し最大の影響力を持つのは最大の哺乳類であるゾウである。ゾウの個体数増加率は年率約 5 %であるとされ、一頭が一日に消費する草は約 200kg、一生の内に約 3 万 km を移動すると言われている。ゾウは木の葉や幹も食べ、また移動時には灌木を倒したりもするため、個体数が増加すると、植生破壊の影響は大きく、林が草原に変化していく。このような場合には他の草食動物にも影響を与え、生態系の変化を引き起こし、公園内の自然環境を総体として劣化に導く恐れがある。ゾウの個体数変化を定期的に綿密にモニターすることにより、一つの公園の環境保全を図ることと、同時に他のゾウの少ない公園を観光対象地として魅力のある公園と改良してゆくことも可能となる。ゾウの移送は、麻酔銃で眠らした後、クレーンで 10 トントラックに移し、移送する方法で行われている。過去、ヘリコプターで移送することもあった。移送には熟練したチームと 1 頭あたり約 20 万円の経費がかかる。

7) 地域住民を巻き込んだ観光開発

ジンバブエの保護区は南アフリカ等で見られるような閉鎖型の自然公園ではなく、開放的であるため、野生動物はしばしば公園周辺の住居地、耕作地まで侵出し、耕作地に経済的な被害が発生する。ゾウやライオンなどでは人命被害が出ることもある。ジンバブエでは公園周辺の住民に公園が発生する便益を還元するという CAMPFIRE 事業が創設され、全国に拡大されようとしている。この事業では、上述のように保護区から出たゾウなどを商業的に処理する権利を組織された地域住民に付与し、農作物に害を及ぼす野生動物を狩猟の対象としている。

野生生物を対象とした観光には、国立公園他において観光客が野生生物を観察し、写真に収めるフォトサファリの他に、スポーツハンティングを対象としたハンティングサファリがあり、特定の狩猟区を設けているゲームリザーブが点在している。政府が管理するサファリエリアの他、政府の認可を得た私有地や住民共有地を狩猟区としている。このような狩猟を対象としたゲームリザーブが生む収益は、その特殊性から高額であり効率が良いと思われる。元来、農耕にも放牧にも適さず経済的な価値の無い広大な面積の土地に生息する野生生物を狩猟の対象にするだけでなく、過剰に増加した余剰のゾウを無価値で処分することよりは、このようなりザーブに移転し

狩猟の対象とする方が経済的な価値を生むと考えられている。ゾウ一頭に対するライセンスフィーは約 US\$15,000～20,000 である。このようなゾウを狩猟の対象として許可している国々は、ジンバブエの他に南アフリカ、カメルーン、ナミビア、ボツワナ、タンザニア、モザンビークの計 7 ヶ国あり、コンゴ、ガボンも現在検討中である。ジンバブエには 1999 年現在、約 70,000 頭のゾウが生息するとされているが、狩猟用に割り当てている頭数は 400 に過ぎない。CAMPFIRE 事業では、このようなりザーブでの狩猟権（コンセッション）を公正な入札制度を通じて狩猟を事業とする旅行代理店に対価を得て与えている。これらコンセッションフィーは、関連地域住民に公共施設、社会基盤整備事業の資金として地域社会に還元されている。CAMPFIRE 事業の年間収益の約 90 %以上は、このようなコンセッションフィーとライセンスフィーによっている。人口は年間約 1.1 %で増加し、ゾウは年間約 5.0 %で増加していることから、多数のゾウが生息し人間との紛争を頻繁に生じている国々において、このような経済価値を生む紛争処理は行政管理が行き届いており、且つ収益が地域住民に公正・公平に分配されるという条件が満たされれば適応可能と考えられるが、CAMPFIRE は今のところ先駆的事业としてその成果を公正に評価する必要がある。

このように野生生物資源と観光収入は極めて密接に関連しており、地域社会を基盤とした便益還元システムも稼動しつつある状況である。今後の（政治的混乱が収拾し、年間 7 %台の観光客入りこみ数が増加するという条件が整えば）観光の発展と、同時に野生生物を始めとする環境保全が持続的に行われるならば、ジンバブエの観光潜在力は有効に生かされ、ジンバブエ経済の基盤を形成するセクターに成長する可能性がある。